

ジェンダー化される留学とキャリアの研究

——英語学習のために短期留学を行なった日本人大学生の語りの分析ならびに 日本人大学生への量的調査をもとに——

大阪大学大学院 北野知佳

1 目的

この報告の目的は、日本において、ジェンダー化されて描かれる英語圏の留学について批判的分析を行うと同時に、行為主体としての日本人留学生たちが、どのように留学経験の意味づけを社会の中で行なっているのか、特に、ジェンダーと社会（キャリア）の関係性に焦点をあてながら、混合研究法を用いて多角的に考察することである。

2 方法

イギリスへ英語学習のために短期留学を行なう日本人大学生（男性2名、女性5名）に対して、留学前、中、後の各々の段階で、半構造化インタビューを行い、ジェンダー、キャリアの視点から、彼らの語りの分析を行なった。また、日本人大学生（男性121名、女性178名）に対して質問紙調査を行い、ジェンダー、留学希望の有無、結婚後の理想的な働き方についてSPSSを用い統計分析（カイ二乗検定）を行なった。

3 結果

民間企業による英語圏での語学留学斡旋広告では、女性のイメージあるいは女性らしさが強調され（Takahashi, 2013）、主に女性が留学生として想定される一方で、グローバル人材をスローガンに展開される英語教育では、学習者の男性らしさを強調した言説が多用されているという結果を得た。このようにジェンダー化される留学の背景を受け、日本人留学生（7名）がどのように自らのキャリアと留学を捉えているか、インタビュー調査を行なった結果、特にキャリアと留学を強く結びつけて考える女性（3名）の語りが見られた。具体的には、英語圏への留学は、女性の社会進出を後押ししてくれるものとして投影されていた。しかし、驚くべきことに、全員が何らかの形で、留学を広義でのキャリア（修学、就職）と結びつけて捉えていた一方で、7名中6名（男性1名、女性5名）が、結婚後は男性が主たる働き手となるべき、という家父長制の社会構造を支持した。グローバル人材になりたいと希望した女性（3名）ですら同じ主張を行った。この結果をもとに、日本人大学生（299名）を対象にジェンダー、留学希望の有無、結婚後の理想的な働き方について問うた質問紙調査を行い、それらの関係性について統計分析を行なった結果、ジェンダー（男性、女性）と、結婚後の理想的な働き方（主たる稼ぎ手、補助）に有意差 ($P < 0.05$) が認められた。具体的には、留学の希望の有無にかかわらず、男性は、結婚後に「自身が主たる稼ぎ手になりたい」とし、女性は「補助的立場になりたい」とする傾向が見られた。

4 結論

民間企業により主たる消費者として女性の留学が後押しされ、女性の社会進出につながる機会として留学が描かれる中で、留学とキャリアとを積極的に結びつける女性の語りが質的調査により分析された。しかし、公共政策の中で、留学経験を通して社会の主たる役割を担う人材像として描かれるのは男性であり、かつ、留学の如何に関わらず、男女ともに大学生自身が、男性中心の働き方を受け入れるという傾向が、質的・量的調査で明らかとなった。特に女性は、留学をキャリアの一環として捉えようとしても、最終的には男性に頼る、あるいは頼らざるを得ないという、ジェンダー化社会を色濃く反映する結果となった。

文献

Takahashi, K. (2013). *Language Learning, Gender and Desire, Japanese Women on the Move*. Bristol, Bristol, Buffalo and Toronto: Multilingual Matters.